

講演

里の思想

—見えない歴史をつかみなおす—

内山 節

一、はじめに

紹介いただきました内山です。私は東京と群馬県の上野村という村を行ったり来たりしながら一年間を暮らしています。気分的には上野村の人間ですので、用事がなければ上野村に戻りますが、なかなかそうもいきません。実は明日、村にまた帰ろうかなと思っています。一年中そんな形で暮らしております。ですので、また上野村の話などもたぶん出てくると思います。「僕の村」とか言ったら、上野村のことだと思っただければいいと思います。

上野村という所は、八月になりますと日航機が墜落した山の近辺の村ということでニュースが流れますが、あの村です。村の九十四パーセントが森林で、現在、村民の数が大体千四百人です。本当に山の中ですので、村の中に水田が一枚もないという所です。ただし昔は養蚕や和紙の生産などで、結構豊かに暮らしていたみたいですね。それと比べると今が一番厳しいのかもしれないけれども、大変独立心の強い村ですので、今回の市町村合併も全くする気はないということです。僕も村の中にい

ても、一人も「ちょっと検討しようよ」という意見を聞いたことがないですね。ほとんど村中満場一致でこれからも独立していくという、そんな雰囲気村にあります。ただし僕はこの村の出身ではない者です。もうじき四十年になりますが、二十歳ちょっと過ぎたぐらいのころに魚釣りに行って、ちょっと気に入ったのでこの村に住もうかなということになって、そんな状態で四十年近くが過ぎていきます。

この後は、そろそろ春の作付けをしなければいけません。うちの村では、一番最初に植えるのはじゃがいもなんです。たぶん四月の早い時期ぐらいには植え終わっているだろうと思いますが、僕の畑は百五十坪ぐらい、だからちょっと広めの家庭菜園という感じです。ただ、今、山間地域の村というのはどこでもそうなんですけれども、作物が取れるかどうかというのは、農業技術の問題ではなくなっていて、動物に荒らされないかどうかという問題になっています。去年は、僕の畑のじゃがいもは動物にやられていないので、四百キログラムぐらい収穫していて、ほとんど友人たちが食べてしまいました。ただ、秋、冬になってから食べる予定の白菜とか大根とか冬野菜があるんですけども、それは僕の方には全く口に入っていません。寒くなってきたときに鹿が出てきてみんな食べてしまったのでももなかったのです。それからあと、消えてしまったのが正月用のネギです。それも冬用のネギがなくなってしまうので、これを取ったのは猿ですね。猿はネギが大好きです。ただ猿のネギの取り方は非常にいやな取り方です。根が生えているちよつと上の方が好きなんです。ですから下だけかじってポイ、下だけかじってポイということで、畑に行きますと誰かがいたずらして抜いて散乱させたかなというような雰囲気になっています。よく見ると根の近くだけ食べられている、これが猿の取り方なんです。猿は椎茸もよく取ります。僕の所は椎茸と言っても、ほだで四、五本で、たまに行つて、出ていたら食べるという程度ですからいいんですけども、うちの村にはかなり椎茸栽培をしている農家がたくさんありますので、そこは大変な被害を受けています。猿は椎茸も茎の部分しか食べな

い。あっちの方がおいしいらしいんです。茎を食べては投げていくというやり方なので、かさの部分がそこら中に散乱しているという状態です。これは生計を立てている人にとっては大問題なんです。今は山の中は猪、鹿、猿に襲撃されているような感じで、その対策がうまく行けば収穫できるし、うまく行かなければ全滅するという、最近の農業というのはそんな感じになってきています。

グローバル化する時代とローカリズム

今日のテーマは「里の思想——見えない歴史をつかみなおす」ということでいただいています。現在、世界はグローバル化している時代というふうに、一般的にも言いますが、確かにその通りというふうに言ってもいいんだろうと思っています。ただ僕の中から見ていきますと、グローバル化していく世界というのは片方に間違いなく存在しているのも事実だけれども、もう一つ新しいローカリズムの志向といえますか、それを目指す人たちがまた世界中に増えてきていることも確かだというふうに思っています。

それは僕自身もそうで、上野村という村の方が僕には居心地がいいわけですけども、これは先ほど言った通り、人口千四百人の非常にローカルな世界、そういう世界を大事にしながら生きていこうという気持ちがあります。しかし上野村という世界でも、既にもう十年以上前から全部の家が光ファイバーでつながっております。非常に高速なインターネット回線はこの家にも入っているという、そういう状況でもあります。これは村役場が作ってくれた光ファイバーなので、僕らにとっては非常にありがたい。月額五百円で無制限で、しかもこれにプロバイダー料込みという不思議な仕組みです。村が村営プロバイダーを開設してまして、全員にメールアドレスを配ってくれました。それを含めて利用料五百円という、大変ありがたいと言えればありがたいことです。インターネット用だけに使っているだけではありません。例えば山の中ですから、高齢者も多いし、それから家も点在してい

ますので、病気になる時なんかにはやっぱり不慣れな問題が出てくるわけです。村には診療所はちゃんがあるんですけども、体の調子が悪くなった高齢者がすぐに診療所に来られるわけでもありません。そんな場合でも、高齢者の人たちにはテレビ電話を設置してあってそれを活用します。というのは、病院の先生との間で電話でやり取りする場合には、我慢強い方もいるし、割にすぐ騒ぐ人もいますので、音声だけだと判断を間違えうんですね。ですから顔が映っている、「ちょっとこれはすぐ見に行った方がいい」とかですね、「これはちょっと放っておいても大丈夫」とか、判断がつきやすいということですね。そういうふうな利用とか、あと、心臓疾患などを持っている人たちには、各家に簡単な計測機を役場が貸しておいて、朝起きたら必ずこれで脈拍や血圧を測ってくださいと言っておきます。測ったデータは自動的に病院の方に送られて、ちょっと異常が出てきているとなると、先生の方から電話をして、顔色を見ながら診てというふうな、そういう利用もしているんですね。いろんな形で利用するための光ファイバーではあるんですけども、上野村という村を見ても、非常にローカルな村を大事にしながら生きているにもかかわらず、もう一方においてはグローバルな世界とのつながりも持っているというのが現在の姿ではあります。

南フランスの村で

これは世界的な傾向だというふうに思っています。四、五日前までパリにいました。今回は休養しにパリに行ったという感じなので、ほとんど何もしないで、ホテルとその周辺の散歩で終わったという感じなんですけれども、日本との比較地としてフランスを使ってきたということがあります。たまたまにフランスに行っただけの様子を見ているわけですね。

今からもう十年近く前ですが、南フランスのある山村と言えそうな、標高が千メートル近い高原状の村に出掛けたことがあります。電車で行って、途中からレンタカーを借りて行ったんですけど

も、ホテルに着いたら、そこにいた村の人たちが「どこから来たんだ」「どういうルートで来たんだ」と聞くわけです。近くにあるミオという人口五万人ぐらいの都市を経由して来たと言いましたら、「ミオの郊外にマクドナルドのハンバーガーショップがあるはずなんだけど、見てきたか」と言うのですね。「いや、急いでいたから、そんなものを見てこなかった」と答えたら、そこにいた人たちがみんな一斉に「いや、それは見なきゃいけない。ぜひ見てこい」というのですね。翌日、ミオまで行ってみましたら、確かにマクドナルドのハンバーガーショップがありました。ただそれは既に焼け落ちた後でした。つまり火事の後で、真っ黒こげのマクドナルドのハンバーガーショップがあったのです。それを見て、村へ帰ってきて「見てきたよ」と言ったら、「どうだ、良かっただろう」と、村人たちは言うんです。それで「我々のこの地域にマクドナルドはいらない。だから皆で行って、火炎瓶投げて燃してきた。だからそれをぜひ見せたかった」ということでなんです。確かに過激な話ですが、彼らは非常に嬉しそうにしている、村の暮らしを楽しんでいました。

この地域というのは、ラルザックという地域で、山村としてはかなり貧しい地域と言ってもよくて、土壌を見ると大変土がやせていて、普通の農業はちょっと無理で、畜産ということになるでしょうが、これだけ土がやせていますと、草の生え方も悪いですから、大食漢の牛とかは到底無理ですね。山羊とか羊を飼っているんです。近くにロックフォール村があつて、そこは羊の乳で、非常に癖の強い青カビチーズ、非常に高級なチーズを作っている村があります。そんなふうにして、粗食の動物を飼って、結構質素に暮らしている地域なんですけれども、自分たちの地域の暮らしをととても誇りにしています。それでその地域にとってはマクドナルドはいらないというわけです。それで燃してくるというのはすごいなあと思いますけれども、何人か逮捕されたという、フランスでは有名な事件らしいんです。村の人たちに聞くと「いや、別に逮捕者が出て問題はない。村に帰ってくれば犯罪人ではないんだから」と言うのですね。

その地域は特にそういう雰囲気強い所ではあるんですけども、フランスの村を覆っている雰囲気にもなっています。つまり自分たちの生きている世界をしっかりと持ちながら、そのローカルな世界のいろんな貴重なものを大事にしながら、しかし一方においては世界中の人たちというんな形でつながりながら生きていく、そういうものを志向する人たちがかなり多くなっていることは確かです。

今の世界の情勢というのを見ていくと、確かに表面的には、どんどん、どんどん、いろんなものがグローバル化しているわけですけども、その一方において、そういう時代だからこそ、自分たちの生きる世界のつかみ直しといったものを試みている人たちも多くなります。そういう人たちがそれぞれの地域での暮らしというものを向けていることは確かです。

ついでに言ってしまうと、フランスでは一九七五年ぐらいから、都市から山村や農村に引越してきた人たちがかなり増えていて、村の人たちが百人ぐらいいたら、少なくとも半分の五十パーセント、五十人ぐらいの人たちは、この二十年か三十年の間に都市から引越して来た人というふうに思っておけば、大體間違いないです。非常に多い所だと八十パーセントぐらいはそうです。向こうの人に聞いてみると、「大體三分の二ぐらいは都市の人だね」と言います。かつてはフランスの農村から都市へという、農山村過疎化の歴史があったんですけども、大體一九七五年ぐらいでその歴史が終わって、逆に都市から農山村へという人たちが非常に増えている時代でもあります。

ちなみに日本でも結構そういう動きになっていて、先ほど私の村は千四百人と言いましたけれども、千四百人中、百八十人が都市から来た人たちです。これは近隣の中では結構多い方ですけども、どの村でも今、そんな雰囲気になっています。都市から来る人たちをどう受け入れていくかというのが課題になってきているという感じですよ。

ですからわたしの村は今、小中学生が百二十人ぐらいいるんですけども、これは同規模の山村としては小中学生が多い村という感じなんです。なぜ多いのか。それはもう簡単な理由で、その都市か

ら来た百八十人の人たちは若いですから、子どもさんがいる人が多いので、結果として、村の小中学校もそこそこの生徒数を維持しているという、そんな状況になっています。ですので、フランスのように過半数が都市からの人ということはないですが、日本でもだんだんそういう動きになっていて、そういう人たちが志向しているものも、地域と共に生きていくという志向だろうという気がいたします。

二、日本における「村」とは何であったのか

—自然と人間の世界、生と死の世界、永遠性を感じられる世界

ところで、日本の村という概念とヨーロッパの村という概念には一つだけ大きな違いがあります。ヨーロッパの村ということになりますと、これは「村」という人間の社会を指す言葉なんです。日本における「村」というのは、決して人間の社会が村ではありません。自然と人間の社会が「村」です。ですから「村」には自然というものが構成メンバーとして初めから入っています。日本の自然観というのは、自然と人間を本来分けてとらえていくものではありませんので、自然と人間の力によって作っている、これが日本人にとっての村という感覚であったということです。

ですからこれは今でも生きておりまして、先ほど冒頭に「動物の被害がすごい」という言い方をしました。僕の間接として、猿については増えているという感じよりも、生活の形を変えてきたという感じですね。山奥で暮らしていた猿が一斉に里の方に出てきて人家近くで暮すようになったわけです。だからこれは増加したというよりも、生活形態の変化というふうな気がするんです。鹿と猪については激増したという感じですよ。

僕が上野村に行くようになった四十年ぐらい前なんですけれども、村では冬になりますと獵期、狩

猟していい時期というのがあります。村の人たちが鉄砲を撃つ人なんかいると山に入って猟をします。四十年近く前ですと、ひと冬の間村全体で大体鹿が二、三頭ぐらい、猪が一、二頭ぐらい撃たれていました。大型動物の猟というのは一人じゃなくて、グループを組んでやりますので、「どこのグループが鹿を捕ったらしい」とかいう話がすぐ村の中で伝わって、肉の欲しい人がもらいに行くといったことがあったんです。

最近ではどのぐらい捕っているかと言いますと、まだちょっと今年の数字を聞いていませんけれども、おそらく今年も鹿を四百頭ぐらい撃っていると思いますね。猪も実は一時期三百頭ぐらい撃っていたんですけれども、最近、猪はちよつと減ってきました。これは伝染病が発生して、ちよつと減ってきたんです。たぶん今年も百五十頭ぐらいじゃないかなというふうに思います。ですからそれだけ撃つてもなお減らないというぐらいに増えているんですね。

山の中を歩いていきますと、鹿の群れにぶつかる時があります。岩場なんかあって曲がっている道を歩いていると、曲がった所で鹿の群れとぶつかることがあります。そうすると鹿の方はボスが高い声を出して、みんなをパーッと逃がします。五、六十頭ぐらいの群れにぶつかることがあって、五、六十頭が一斉に走りだすと地響きがするという感じですよ。今それぐらいたくさんいるようになってしまいました。

猪が増えてきて畑を荒らすようになった時に、村の人たちが顔を合わせますと、どこの家でもやられていましたので「困った、困った」という話になりました。そうすると高齢者たちがみんな言っていたのは「落とし穴を作れ」ということです。動物というのはいつべん歩き始めると毎日同じ所を歩く癖があります。特に猪というのはその傾向が強いものだから、畑に向かって道が付いているみたいになっています。だからその道の途中に落とし穴を作るといことなのです。そして村の人に教わったのはおにぎり型の、つまり上が少しすばまっているタイプのおにぎりの落とし穴を作るといいということです。

これだと動物は出て来られないからということですが。「それでやっておけば必ず落ちる。それが一番いいから早く作れ」とみんな言うんです。ところがその言っている人たちも被害に遭っているのに作ってないわけです。人には「作れ」と言うけれども、自分は作ってないわけです。それで僕も結局作らなかつたけれども、村中誰も作らなかつたようです。

それでどうしてなのだろうということですが、結局、動物というのは村の人間から見ると、まず村に暮らしている仲間なんです。つまり村人なんです。つまり村というのは自然と人間の世界ですから、人間だけが一方的に威張ってはいけません。ですから猪もまた村の仲間という、そういう気持ちがあるということです。ところが現実には畑が荒らされているわけですから、畑を荒らすという点では害獣ということになります。さらに冬になりますと猟をしますから、そうしますと狩猟の対象にもなるわけです。ところが村の人間たちは動物をかなり尊敬もしています。結局ああやって自然の中で生きていけるということ自体がすごい能力があるからだというふうに尊敬しているわけです。ですから人間以上の知恵も持っているし能力も持っているということで、尊敬の対象でもあるわけです。それからある種の動物というのは神様のお使いとしての扱いも受けているわけです。

ということで、実は人間と動物の関係というのは非常に矛盾に富んでおりまして、仲間なんだけれども害獣だし、狩猟もするし、尊敬もするし神様のお使いにもなるということです。つまり村の人間から見ると真理というのは一つではなくて、いろんな真理があるんだということです。そのいろんな真理を見ながら、その時点、その時点でどういうふう折り合いを付けていくか。その折り合いの付け方が村の人間の能力だということになります。だから動物たちは自分たちが大事にしなければいけないもので、猪に荒らされ始めたところというのは、やっぱり落とし穴を作って捕ってしまおうというのでは、やっぱり折り合いが付かないというふうに思っていたということです。だから「やる

「いいよ」と言いながら、誰もしなかつたんだというわけです。

何で折り合いが付かないかというと、そのころ、猪が増えたのか、それとも猪がただ生活形態を変えて里に下りているだけなのか、よく分からなかつたんです。もしかすると、これは里に下りているだけではないかというふうに思ったわけです。もしそうだとするならば、なぜ里に下りるようになったかという、それは山の方に餌がなくなっているからです。それは森林が荒廃しているというふうにも言ってもいいわけです。ではなぜ森林が荒廃したかという、これは人間の責任ということになります。そうすると人間の責任で山から追い出された仲間たちが里に下りてきているということになります。それで確かに被害は出ているけれども、被害が出るからといって捕つてしまふというやり方は、やっぱり折り合いが付かないということなのです。それで「困った、困った」と言いながら被害が出続けたということでもありました。ただその後、時間がたつてくると、これは生活形態を変えたというよりもかなり増えたということが分かってきたのです。そのあたりから積極的に捕獲するようになりました。ただ捕獲するようになってからもやっぱり冬場しかやらないのです。なぜかと言うと、冬の猪というのは捕るとすべて無駄なく使えるからです。肉は食べてしまいます。ところが五月ぐらいからの猪になると、肉は恐ろしくまずくなりますので、これは飢え死にでもする寸前だったら食べるでしょうけれども、そういうことでもなければまず食べられる代物ではありません。何にも利用できなくなってしまうのです。だから殺戮するだけになってしまう。これはやっぱり村の人間として折り合いが付かない。やはり昔から猟はしていたけれども、それは大事に使わせてもらうことによつて折り合いを付けているわけで、ただ殺すだけというのは折り合いが付かないわけです。だから冬場の猟期だけ猟師さんたちに頑張ってもらつて、その時にはみんな応援して、できるだけたくさん捕つてくれというふうに言っているわけです。その時期が終われば、また被害が出てもそのままという状況を今だに続けています。

ですからここにも村に暮らした人間たちの発想があつて、つまり自然も含めて村だし、そして自然と人間の関係の中にはいろんな矛盾をはらんださまさまな真理があつて、その中でその時にどうしたらいいか折り合いの付け方を考えていくのです。そうやって生きてきたのが村という自然と人間の世界です。

同時に村というものは、生きているものたちだけの世界ではなくて、実は死者たちの世界でもあります。これはかつて柳田国男が述べて以来、定説になつていふ言えます。人間たちが死んだら魂はどこに行くかということについて、かつての人たちはどう考えていたかということですが、住んでいる時に自分の家から見えるぐらゐの距離の山、その森の中に魂は帰つて行くと考えていました。魂は自然と一体化しながら、今度は村の人たちを守る神様になつていくという、そういう死後観をかつての人たちは持つていました。

これも不思議なんですけれども、今、例えば、村の人間たちに、「死んだら魂はあるでしょうか」という質問をしたらですね、ほとんどの人たちは「なきそうだ」とか、「ひよつとしたらあるかもしれないけれども、そんなことは知らない」とか答えて、確信を持つて「あるよ」と言う人はたぶんほとんどいないと思います。その点では都会の人と同じですね。だけれども、村で暮していると、何となく死んだ後、魂が森へ帰つて行つて自然と一体となつていて、子孫たちを見守つていて、この物語というのが何となく納得ができるんですね。つまりそんな感じがいいんじゃないかという、そういう気持ちにさせられるということですね。

ですから今だにこの死生観というのは生きているわけです。つまり村というものは生きているもの世界でもあるけれども、先祖たちの世界、つまり死んでいった者たちの世界でもあるわけです。あるいは自分がこれから行く世界でもあつて、だから生と死の世界全体を統合しているのが日本の村というふうに考えていいんだらうと思ふんです。

同時にこの「村」というのは永遠の世界だったわけです。このへんは今でも不思議なんですけれども、例えば、私のいる村は今、人口が千四百人です。高齢化率が四十パーセントです。ですから「この後 村はもつんですか」という質問をされますと「よく分からない」というのが本当のところですよ。それでも中心集落の方はいいでしょけれども、例えば僕がいる集落になってくると、八軒ぐらゐの山の中の集落ですから、その八軒ぐらゐの集落で高齢化がどんどん進んでいますので、「これ本当に最終的に存続可能なんでしょうか」と聞かれますと、「危ないかもしれませんが」というふうに言わざるを得ないです。ところが村に住んでいる人間の感覚では、「いやまあいろんなことがあるけれども、村は永遠です」という、そういう気持ちを持っているんですね。

東京の人たちが調査に来たり取材に来たりすると、村の人はどう言うかということ、村の人たちはおもてなしが好きですから、おもてなしをします。おもてなしということで、お茶を出したりするおもてなしもよくやってくれますけれども、彼らは何を求めて来ているかというのをよく考えて、それに応えてあげるといっておもてなしがあるわけです。そうすると、東京のマスコミ関係者とか大学の研究者とかが来ると、過疎化していて大変だろうという考えで調査に来るわけですね。そうすると村の人たちはおもてなし感覚で、「いや、もうこの村はもたないかもしれない」とか、「あと十年たったらどうなっているか分かりません」というような答えをします。だけど間違えてはいけないのは、これもおもてなしで言っているんです。だからその人たちが帰ると「まあそう言っておいたんだけれども、まあそんな事もないだろう」とみたいな話になります。それはどんな場合もそうで、何を聞きたがっているか、それに応じてあげるといって親切心がありますので、あまり鵜呑みにしない方がいいわけです。

村の人たちがよくこんなふうに言います。「こういう地域に住んでいると自分たちにとっては当たり前前の世界と思って生きているものだから、都会の人たちが来ているんことを教えてくれると、逆

に自分たちの住んでいる地域の価値がよく分かる。何気なく過ごしているものの中にいいものがあることがよく分かる。」これは最近のおもてなしの最たるものです。村の人たちはこう言いますが、実は村の人たちの方がよっぽど自分たちの住んでいる世界の価値を知っているんですね。これは都会の人たちにそう言うと言えらるということを知っているのです、これもおもてなしの精神でしゃべっているわけです。当たり前話でそこに住んでいる人間が一番その地域の価値を知っているに決まっているわけです。たまに来た都会の人たちに教えてもらわなければならないほど知らないわけではないのです。でもこういうことを村の人はよく言います。

つまり話を戻しますと、ただ統計的に見ていくと、確かに今の村というのは大変厳しくはなっている。しかしそこに住んでいると、この営みは永遠であるという、ある種の確信を与えられる。これらどこに根拠があるのかと言われても困るのですが、例えば僕はこの後、村に帰ると、先ほど言った通り、春の作付けの準備に入ります。うちの村では、四月に入るといろんな集落で順次春祭りがあるので、春祭りまでに春の作付けを終えなければいけないという、別に決まりではないですけども、昔からの習慣があるんです。村の人間としてはこれが遅れますとあまり気分が良くない。別に誰かに何か言われたりすることはないんですけども、何か悪いことをしているような気分になってくる。ですから何としても春祭りまでには作付けを終えてしまおうというふうにみんな考えます。

僕の使っている畑も少なくとも千年以上は畑として使い続けられてきたわけです。僕は上野村の出身じゃないから、誰がこの畑を使ってきたのかなんていうことは全く分からないですけども、ただ千年以上にわたって誰かが常に耕してきた。そのことよって畑が畑になっている。山の中ですっかり、初めは石だらけだったのに決まっているわけですね。その石をどけて、堆肥を入れて、というのを繰り返しながら、まずまずの畑を作ってきたわけです。その営みというのはこれからも永遠に続くだろう。そういう気持ちになってくる。僕の後、今度は誰がやるのか分からないし、一時的には休耕

地になることはあるかもしれないけれども、長い目で見れば一時休むだけで、やっぱり誰かが耕し続けて、誰かが暮らし続けている。そういう暮らしというのは続いていくんだろうというふうにいるんです。

こういうものも頭の中の理解ではないわけで、頭の中で理解をしていくと、出てくるのはたちまち数字が出てくるわけです。最近、人口が増えているのか減っているのかとか、高齢化率が上がっているのか下がっているのかとか、あと、村の所得がどうなっているのかとかですね。そういう数字を見ていくと、これはかなり危ないかもしれないということになっていくわけです。しかしそのように理解する世界とはもう一つ違う自分たちが絶えず了解している世界というのがあって、その了解している世界の中では一時的にはピンチがあるかもしれないけれども村の営みは永遠であるという、どこかそういう確信を与えられているという気がします。

それは先ほどの動物と人間の関係でもそうです。いろんな真理があって、どこで折り合いを付けるかということも、理解してやっていくことではなくて、村で暮している人間たちの了解なんです。その了解を与えてくれるものこそが村なんです。つまり村にいと何となくそれでいいんだという気持ちにさせてくれるということなんです。

だから僕もそうなんですけれども、村で畑を耕しているとこんな気持ちになります。昔から本当に千年以上にわたって春になるとずうっと同じことを誰かがしてきた。その人たちはもう名前も分からないし、仮にそこに子孫がいたとしても、千年も前の人たちの名前なんか分かるわけではないが、その人たちの営みが続いて、そこに畑が続いて、集落が続いて、村が続いている。だから自分もまた同じように、元気な間は畑ぐらい耕して、それで長い歴史のある部分を担当する。それで十分なんではないか。つまり人間の一生なんていうものはそれ以上のことを望む必要はないのではないか。畑をやっていると何となくそういう気持ちになってきます。だから何もあせる必要もないし、それから何か大

きな目標を立てる必要もないし、ただ昔の人たちがやってきたのと同じように、ある一時期その歴史の中でちょっと役割をこなすということで十分満ち足りているのではないか。そういうことにもある種の了解ができてくる。その了解の中身とは何かという理解の話に持っていくとよく分からない。ただそこにいるとそういう気持ちになってくるということなんですね。そういう世界こそが日本で「村」と呼んできたローカルな世界だったんだろうという気がいたします。

三、歴史についてのふたつの意味

—紀年体の歴史、蓄積された歴史

そういう村にありますと、村では寄り合いというものがあって、何か課題があるたびに集まって、みんなして決めるわけです。昔はその家の戸長に当たる男性だけが集まってやっていたわけですが、今ほはたいていどの集落の寄り合いでも、いる者はみんな出て来いという感じですね。子どもは来ませんが、男も女も関係なく、成年に達していれば全員出て来て一緒に議論しようという雰囲気になっています。

僕の村では、一年の最初の寄り合いを一月一日十一時からと決まっています。だから十一時に当番の家にみんなが集まります。それは極めて真面目にやって、去年の一年間の集落のいろんな方針の確認と、それがどこまで実行できたかどうかとか、集落だけでは実行できないものもありますので、そういうことも含めてすべて点検をします。あと、集落の予算も多少ありますので、その確認をして、それで一応集落の責任者みたいなのがいるので、その人に「ごくろうさま」と言って退任してもらって、次の責任者を決めて、それでこの一年間の集落の基本的な方針を決めます。それで終わります。ただ何が課題になっているかみんな知っているので、すべての事は実に簡単に決まって、「次に

あの件だけ」と言えば大体決まってしまうというぐらい、みんなは内容が分かっていますので、簡単なのですが、一時間ぐらいかけて新年の寄り合いというのをやります。その後、新年会になって少し飲物なんか出てくるという格好なんです。

このところ毎年一応議論されているのはこんなことです。僕の集落には、山の中腹に出ている湧水があって、その湧水をみんなで引つ張ってきて、最後は水道の状態で各家に配るという自前の水道を持っているんですね。この水は伝承によると弘法大師が発見した水なんです。村の人間は誰も信用していないんですけども、一応伝承によればそうなっています。その弘法大師発見の水というものを引つ張ってきて、配っていて、自前ですから水道料金無料になっています。ただ三年ぐらい前から修理費として月五百円を取るということに決まったので、年間六千円を払っているんです。ただし登記上は農業用水です。水道になっていません。農業用水にしてある理由というのは、せつかく山のいい湧水を使っているのに、水道にすると消毒液を入れないと保健所がうるさいんです。それで数軒の家だけで使っているのです、そのことはみんな承知しているので、万が一病気でも発生したことがあつたならば、それは自己責任でということです。それで全員の一致で消毒液を入れたくないということで、登記上は農業用水ということになっています。

ただこれは山の中腹から引つ張っている水なので、水量は豊富なんですけれども、やっぱり時々掃除をしたりいろんなことをしないといけません。特に最近冬が暖かくて、そういうことはなくなりました。昔は真冬に引つ張つて来ている途中で凍結してしまうことがあって、それで断水していました。大体真夜中に凍結してしまい、水が出なくなつたということが昔ありました。十二月三十一日に凍結してしまって、午前一時ごろ召集がかかって、みんな出て行って、懐中電灯を持って山を歩きながら、どこら辺で凍結したか調べていきました。見つけてそれを壊せばいいんですけども、作業が終わつたのが午前五時ぐらいで、全く寒い正月だったということがありました。そういう

ことが起きたりもしていて、だんだん高齢化もしているので、ちょっと大変かなという議論も、それだけは毎年やっています。

その場合に一つの手は、その水道施設を村に寄付する形を取って村営水道にしてもらうということです。そうするとその後は村の管理に移りますので、そろそろそれを考えてもいいかなという議論は毎年あります。最終的にはどうなるかと言うと、今年はとりあえず今までと同じでということになるんです。それはなぜかと言うと、一つはやっぱり村営水道になっちゃうと消毒液が入ってくるので、それを回避したいという気持があることは確かなんです。ただもう一つは「自分たちの水ぐらいやっぱり自分たちで管理できないのは、ちょっと情けないからやめようや」という気分ですね。そんな気分になってきて、「じゃあとりあえず今年はまだやれるので、例年どおり」ということになりません。十五分ぐらい毎年その議論をしています。ですから、そういうところにも村の人たちにとつての村、つまり自分たちで作り、自分たちで治め、そして自然と共に生きてきた村、そういう世界があるということなんです。

そういうふうな議論をしていますと、時にはちょっとみんなが頭をひねって考えるというような課題が出てくる時もあるわけです。「今回こういう課題があるので」ということになると、みんなが急にシーンとして「うーん」と考えている。その時に村の人が何を考えているかと言いますと、その課題に対してどういう方法をとった時に、この村にとっては一番ふさわしいやり方かというのを考えているわけですけれども、その一番ふさわしいやり方で迷っている時というのは何を基準にしているか。昔からどういう方法を使ってきたのかというのをみんなで思い出しているのです。だから例えば森林管理の方法なんかで、あの森、どうしようかというような話が出てきた場合に、みんなが「うーん」と考えます。それは昔からどういう方法を使ってきたのかを思い出しているわけです。それでそれを思い出すと、それを今やった場合に適しているやり方かどうかを考えています。だから村の人た

ちが考えている時というのは、絶えず過去に向かって考えているわけで、歴史的に見て何が一番妥当なのかという、そういう形で歴史を振り返っているとどうもいいのです。

これがまた村という世界のひとつの特徴で、つまり過去と現在というのが断絶なくつながっているんですね。だから絶えず現在の方法を考えるために過去が出てくる。それは先ほど言った通り、僕がこれから村に帰って畑を耕すということ、そこにも絶えず過去というのがあります。つまり畑自体が過去の歴史の積み上げですから、そこに過去は蓄積されている。そこで先ほど言った通り、畑を耕していると千年前の人も同じようなことをやっていたという、その事に一つの安心感があります。だからそういう歴史がそこに見えているわけですね。

ですから「歴史とは」という言葉を使った場合に、実はここには二つの違う意味があるわけです。一つはわたしたちが学校で習ってきたような、例えば一六〇〇年に関ヶ原の戦いがあったとかですね、それから一八六七年に江戸時代が終わったとかですね。そういう歴史年表のような紀年体で書かれた歴史です。それが変動の歴史とすると、もう一つの歴史というのは、その地域の中に蓄積されている歴史です。つまり昔からここではこういう方法を使ってきたとか、それから自然と人間はこういう関係でずうっと生きてきたとか、それから畑に対してはこういう関係で人間たちは生きてきたとかいうふうにして、ずうっと村の中に歴史が消えることなく蓄積されていく。そういうもう一つの歴史があります。つまり村の人たちが考えている時というのは、その後者の歴史の方を振り返りながら、それで今回も行けるかどうかというのを考えているのだと思うんです。

実は去年の秋に村にいたら、村の人が一人山から下りて来ました。僕も若干ですけれども裏山というのを持っていて、その僕の裏山辺りから村の人が下りて来たのです。知っている人だったんで、「何しているの」と言ったら、「山の中にある石仏を調べている」と言うのです。「教育委員会か何かに頼まれたのか」と言ったら、「いやいや個人的にやっている」と言います。群馬県が各村に、そう

いう名もない石仏みたいなものがどのくらいあるかを調べる調査を依頼したらいいですね。上野村も上野村の教育委員会が調査をしたらいいんですけども、彼に言わせるとその報告書が出たら、上野村の石仏が全部で百五十ぐらいになっていたとのこと。「自分の感覚としてはそんなもので済むはずがない」と言うんですね。「だから非常に不十分な調査をしたと思われるので、ちょっと暇が今できたから自分で山歩いて調べている」と言います。その人はそういうことをしそうなタイプの人なんです。

村のいろんな人たちにまず話を聞いて、どこにどんなものがあるか、話から地図を作っていて、それを全部自分で確認をして、写真を撮り、文字なんか彫っているやつは全部読みとり、いつごろ出来たものか分かるものは調べてという、そんなことをしているんだと言うんです。僕が会った時点で四八七と彼は言っていましたね。「まだまだある」なんて言っていて、彼に言わせると六百ぐらいは間違いなくありそうだとのことです。確かに山の中というのは、人々がいろんな形で阿弥陀様を持って行ったり、観音様を持って行ったりして置いていったものがたくさんあるので、それも歴史的にはたくさん積み上がっている。今となつてはなぜこれが置かれたのかという一つずつの理由というのは全く分からないんですけども、そのことがたくさん積み上がっていることによつて、かつての人たちが自然に何を見ていたのかということだけは見えてくると思うんです。

群馬県というののもともと宗教的には自然信仰、山岳信仰の強い地域です。山を神様として見ていくといいますが、そのような山岳信仰系の強い所ですので、うちの村ももともとはそうだったので。ただ山岳信仰、修験道と言われたものですが、修験道について言うと、明治五年に明治政府は修験道禁止令を出して、これを弾圧してしまつたんですね。修験道の復活は昭和二十一年の新憲法の発布以降です。ですから日本の地から修験道がほとんど消えてしまつたと言つてもいいわけです。今、関東地方で正式に修験道を名乗っているのは高尾山ですね。後は山形県の出羽三山なんかも

修験道ですけれども、あれも明治以前の形にはまだ戻っていません。上野村もそういう山岳信仰の強かった地域ですので、当然ながら山の中にそういう石仏を置いたりして、人々が祈りを捧げていたということだろうと思うんですね。

だから一つのローカル地域というのは自然と人間の里なんですけれども、その自然と人間の里の中に自分たちのいろんな信仰が入ってきていて、その信仰の中で石仏が置かれたりして、その中にまた、死んだ後、人間たちが帰って行く世界があったりして、そういう全体で一つの永遠の世界を作っている。これがかつての里の世界であり、ローカルな世界だというふうに思っているんじゃないと思います。

四、自然の永遠性、暮らしの永遠性

——日本の自然信仰と自然の意味

日本の自然観ということ、まず、第一に言っておかなければいけないことは、今、わたしたちは自然とか自然観という言葉を使っているんですけども、この自然とか自然観という言葉は大体明治三十年ぐらいからの言葉です。これは外来語の翻訳のために作った言葉というふうに思っていた方がいいと思います。どうもフランス語の方の *nature* という言葉を訳したのが始まりらしいです。英語の *nature* でも同じことですが、それを翻訳しようとした時に日本語に適する言葉がなかったの、この言葉を作ったというふうに思えばいいと思います。

日本語にはなぜ「自然」がなかったのかと言うと、自然と人間を分けるという発想がないからです。だからあの森があったり、あの川があったりするの、あの人がいたり、あの子がいたりするのと同じという、そういう発想ですから、自然界、人間界という分類法がない。だから英語の *nature*

みたいなのを訳そうとすると、適する単語がなかったのです。そこで自然という言葉がこの時に発明したわけです。ただしこの漢字としての「自然」という字はもう古くから使われている漢字で、これは多くの場合、「じねん」というふうな発音されていました。「自然」という字を訓読みして行く「自ずから然り」となります。だから自ずからのままに展開するということを「じねん」と言ったわけです。

ですので、今ですと自然にそうなったとか、それは自然の成り行きだとか、我々は今でも使うことがありますけれども、これがかつての「じねん」の名残というふうな思えばいいということです。だから「自ずから」を指すものです。ところが訳語としてこれを「しぜん」と読んで使ったというのは、訳語としてはまあまあだったのかなという気がするの、人間たちは最も自ずからのままに展開する世界として自然を見ていたことは確かだからです。だから訳語としてはまあまあかなという感じなんです。ただしこの「しぜん」と読むことについては、実は鎌倉期ぐらいから「しぜん」と読むケースがあつて、江戸期なんかには結構使われているんです。この字で「しぜん」と読んだ時には「突然に」という意味で使われてきた単語です。だから「じねん」というふうな読んだ時には「自ずから」という意味になっていて、「しぜん」と読んだ時には「突然に」という意味なんです。

なぜ、「突然に」と「自ずから」が同じ漢字なのかと言うと、現象としては「突然に」なんです、よく考えてみると実は「自ずから」の理由があるという、そういう認識をしていたということなんです。だから例えばある人が突然怒り始めた。理由が分からないから「何であの人、怒っちゃったんだろ」と言いますが、まさに突然に怒っているわけですね。だけでも、よく理由が分かってくる、その怒ったのにもやっぱり自ずからの理由があるということなんです。

あるいは秋になると台風が来る。嵐が来るのは突然に来る。今だと我々は人工衛星からの画像を見て、「もうじき来そうだ」とかやっていますけれども、昔ですから突然に来る。だけでも実は突然で

はないわけで、自ずからの理由があつて嵐が来ているというふうには人々は考えている。だから「突然に」と「自ずから」というのは、実は一対の考え方として展開されているわけです。だから同じ字を讀み違えて意味を変えていたということなんです。明治になりますと、natureを訳さざるを得なくなって、違う意味で「自然」という単語を使うようになったということです。それが今普通の使われ方になってしまったというわけです。

先ほど言った通り、日本の人々は、純粹に自ずからのままに生きている世界として自然を見ていました。実は日本人にとつては、この「純粹に自ずからのままに生きることに」、ある種の理想があつたのです。だから自ずからのままに生まれて、それで自ずからのままに働いて、そして寝て、そして自ずからのままに死んでいくという、そういう作為のない世界。自分自身で作為をもって動かしていく世界ではなくて、まさに自ずからのままに生きることにこそ、本当の人間の理想がある。だからすべての作為を捨てて、自ずからのままに生きるというのを悟りというふうに考えていたわけです。そういうふうなことを理想としていた。

ところが人間というものは、自ずからのままに生きていけない。どこかにそこからはみ出してしまふ。そういう一面を持つ。それはなぜかと言うと、人間が自己とか自分とか私とか、自我とか、どういふ単語を使つてもいいんですけれども、「自分なるもの」を持っている。自分なるものを持つているものだから、自分の目的とか欲望が出てくる。自分の目的とか欲望が出てくると、そこから不必要なもののため込んだり、それから人より偉くならうと思つたりという、そういう余計なことが始まる。それが自分たちの精神を汚していく。ですからこのところが西洋思想とのかなり根本的な違いで、西洋の発想というのは人間が自己を持って、むしろ目的を持つたり、欲望を持つたりするからこそ、文明が発展し、より良い社会ができてくるんだというものです。

それに対して、日本の伝統思想というのはむしろ逆です。人間が「自分」なんていうものを持って

いるから、変な欲望を持ったたり、目的をいだいたりするようになっていく。それで最後は争いを起こし、戦争までやってしまう。つまり人間はそういう実に残念な面を持っているというふうに見えていく。だから自己とか自分を持つということを、実は負の要素としてとらえている。それに対して自己とか自分というものを持たないからこそ、自然界というものは自ずからそのままに生きていくことができる。そういうふうに見ていたということなんです。

そういうふうな発想の人間たちからすると、人間たちというのは生きる過程の中で自分の魂を汚しながら生きていく。それに対して、魂が汚れることのない純粹な世界、それを自然に見ていく。だから自然が真理です。自然というのは真理であり、神でもあるわけです。自然の中に神を見出していく。むしろ人間は死んでから自然と一体化して、人間もまた神の世界に移行していくという、そういうふうな世界観というか死生観を持ちながら生きていた。

ただし、日本の伝統的な発想というのは、実に面白いなと思うのは、自分を持っているからこそ欲望を持ったたり、目的を持ったりして、結局魂を汚してしまうというふうに否定的に見ていながら、だけどそれが人間だというふうに肯定もしているということなんです。その時にどういう表現を使うかというと、「人間は悲しき存在」ということになっていくわけです。つまり悲しきものという形で人間を見ていく。つまり悲しいと言っているわけですから、それはいい事だとは絶対言っていないわけです。けれどもそれをいい事じゃないからたたきつぶしてしまいなさいとも言っていない。むしろその悲しきを見つめながら生きなさいという、そういう感じだとらえているというのが、実にうまい。このへんの折り合いの付け方がうまいなあという感じがしています。

そここのところの悲しさというものを慈しんでくれるものとして、仏の慈悲というのが出てくるわけです。そんな形で仏教なども解釈しながら、日本の信仰的世界ができていった。ですから日本の信仰的世界というのはどこか自然信仰と結んでいた。その自然信仰というのは、先ほど言った通り、自ず

からのままであるからこそ真理の世界。そしてそれは人間が最後は行きたい世界。そういうものとしてとらえられていた。

だから、村というものは自然と人間の世界だと言いましたけれども、この自然もまた矛盾に富んでいるといえは矛盾に富んでいるわけで、この自然というのは人間たちの生活を守ってくれる装置でもあるわけです。それは森があつて守られているし、森があるからこそ水があつて守られているということは言えるわけです。

今ではそんなに重要ではなくなつたかもしれないけれども、かつては森の薪がなければ燃料は手に入らなかつたわけです。そういうふうにいるんな点で生きている世界を守っているのが森ということも言えると思います。その中では使っていく森というものもあるわけです。必要とあれば木も切るし、利用もしていく。だけどその世界と言うのは、自ずからのままに展開する真理の世界、人間以上の真理の世界でもあるわけです。そういういろんな面から自然というのを見ながら、じゃあ今、自分たちはどういう折り合いをつけながら生きていくか。そのことを絶えず考えてきたのが、かつての人々だったというふうに思えばいいような気がします。

五、『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』をめぐって

——一九六五年とは何であつたのか

実は「見えない歴史をつかみ直す」という副題に関連してですが、あまりページ数のない本ですけれど『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』というタイトルの本を講談社の現代新書から二〇〇七年に出しました。その中でこの問題に触れたので、ちょっとそのことも織り交ぜながらお話ししていきます。

実は僕は小さいころから魚釣りをやっていて、上野村に行ったのも魚を釣りたいがために行ったというのが本当なんです。魚釣りだけは北海道から九州まで、僕は川釣り専門なんですけれども、ヤマメとかイワナとか、そういう系統の魚です。釣りに費やした時間と、そのために動いた距離だけはかなり長い。最近でもやってますけれども、最近はもう上野村でもっぱらやって、あまりよそには行かなくなっちゃいました。実は一九六五年ごろというのは僕がちょうど高校に入った年なので、このころは山の中に一人で行くことはなかったんですけども、二十歳ぐらいになって自分で車を運転するようになって、いろんな所に自分でも行くようになりました。そのころ、僕の釣り方というのは、魚釣りには行くんですけど、どこかに行ったら必ずそこで泊るといって釣り方をしていました。というのは泊るといふんな事が分かってくる。そっちの方がまた面白かったもので、一泊でもいいから必ず泊るといふ、そういう釣り方をしました。そうすると村の人たちともいろんな話ができ、その話の中で、これは日本中どこに行ってもそうなんですけれども、かつて村の人たちはキツネにだまされたという話がたくさんあった。

例外的にはこの話がないのは四国ですね。四国はもっぱらタヌキにだまされていてキツネにだまされた話がない。その理由は簡単にキツネはちょっとしかいないんですね。ほとんど一生の間に見ることがない。山の中に暮らしている人でも一生の間にはほとんどのは見ることがないという、それぐらいいしからない。四国には、四国のキツネが何かいたずらをして弘法大師に怒られて、それで四国から追放されたという伝承があります。その代わり四国ではもっぱらタヌキがすべての役目を引き受けているということで、人間がだまされていることには変わりがない。

ちなみに弘法大師伝承によると、その時に本州との間に鉄の橋がかかるまで帰って来てはならないといって追放されたという、そういう伝承になっていまして、最近四国で話を聞きますと、キツネを見る人が増えてきています。鉄の橋ができたならキツネが戻って来たのかどうか分かりま

せんけれども、最近ちょっといるらしいです。北海道のキツネは北キツネで種類が違うので、僕にはよく分かりません。

ただ四国は例外であったとしても、日本中いたる所でキツネにだまされたという話はたくさんあったと言います。特にだまされたというほどではないけれども、キツネ火を見たというぐらゐの話になつてくると、こんなのは山の中に住んでいる人だつたらみんな見たことがあるというぐらゐです。本当にキツネの仕業かどうか知りませんが、ともかく山に大きな火の玉がコロコロと転がったり、横にすべったりするというそういう現象です。そういうものも含めて、かつては本当に山のようにそういう話が発生していったんです。

ところがある時に気が付いたんですけれども、一九六五年あたりを境にして、すべて「昔こういう話があった」という話になっていて、つまり一九六五年以降、新規にキツネにだまされたという話が発生してないのです。二、三十年前に、つまり一九六五年以降にキツネにだまされたおばあさんが津軽にいるという情報を最近になつて聞いたので、今度は会いに行つてみようかなと思つています。この六五年というのは正確な話ではありませんから、もしかするとどこかにはいるかもしれません。ただ、六五年あたりをもつて、それまではたくさん発生していた話が、そのあたりからパタッと発生しなくなるんですね。そのことに気が付いて、各地に行くたびに「最後にだまされたつていつごろの話だ」と聞いたんですけれども、本当に六五年ごろでパッと終わるんです。ですからそこら辺から、なぜ六五年ごろで新しくだまされた話が発生しなくなるのかということに関心を持つて、それで村の人とかいろんな人たちに「なぜ六五年以降、発生しなくなったのか。その理由はどこにあるのか」ということを質問して歩きました。もちろんこれは何の科学的根拠もない話でして、みんな、もしかするとこれが理由じゃないかと、思いつくことを言います。

一番多かった理由として挙げられていたのはこんな理由です。日本は一九五六年から戦後の高度成

長に入るけれども、山村、農村になりますと、高度成長が実感されてくるのはもうちょっと後で、六〇年代の前半に入ってくるとだんだん実感されてくる。高度成長によって、日本の人間たちがすっかり経済的な動物になってしまつて、そういうことによつて自然からのメッセージが読めなくなつた。だから自然的な人間から経済的な人間へというような移行があつて、それが人間の能力の何かを低下させたと言える。そういうふうなことを言う人たちが一番多かつたのです。

ただ他にもいろんな意見を言う人がいて、コミュニケーションの在り方が変わったというのが大きいんだという人もいました。というのは都市部ですと、五〇年代の後半からテレビが入ってくる。農村とか山村とかでいきますと、もうちょっと遅れてくるんですけども、六五年ごろというと、それも普及してきました。そうするとそれまでというのは、コミュニケーションというのは、田舎だと、まず人間から人間に伝えられるコミュニケーションが一番大きいわけですね。そうすると、コミュニケーションにもまた読み取る能力が必要なわけで、例えば同じ情報を伝えてくれても、あの人が言っている話はそのまゝ信用していいけど、あの人が言っている話は半分ぐらいにしておこうとかですね。あの人がこんなに暗い顔をしているというのはよほど困っているとか、そういういろんな読み取りが必要になる。ところがテレビになってきてしまうと、そういうふうな人間が読みとつていく能力を必要としない形で一方的に情報が入ってくる。まだラジオの時代というのは音声だけですから、音を聞きながら自分で想像するという能力が必要になるんだけど、テレビになると画像が出てきてしまうものだから、そこで情報の受け取り方とかコミュニケーションの在り方みたいなものに、何か大きな変動が発生したんじゃないかというふうに言う人たちがいる。

同時にそのころ、電話というのが普及して、電話になつてくると要件だけみたいな話が増えてきます。人間の顔を見て要件聞いている時には、さつきも言ったように、あの人がこんな顔色悪くて来ているということは、これはすぐに答えてあげなきゃまずいとか、いろんなことをこつちも考えながら

やっているわけですけれども、電話になると、両方が要件を言い合っているみたいな感じになって、そもそもコミュニケーションの何かが大幅な変動をしてしまったのではないか。だからあのころのテレビとか電話の普及によって、人間のコミュニケーション能力というものに何か大きな変動が発生していて、それが結局キツネとか自然からのメッセージみたいなものを、結局読みとれない人間に変えてしまったのではないか。そういうふうに言う人たちが二番目ぐらいに多い。ちなみに一九六五年というのは、宇宙中継が始まった年です。だから世界中の人が同じ時間に同じものを見ることが可能になった年でもあるわけです。

さらにいろいろな意見があるわけです。例えば「このころに進学率が向上したのがいかんかったのではないか」という人がいました。結局、進学率が向上したということで、教育の内容が大幅に変わっただ。つまり進学のための教育、簡単に言えば偏差値を上げるための教育に切り変わった。それまでは、村の教育というのは、ある程度の基礎的なものは教えているけれども、中学出たら一人前となつて村で生きていく人間をつくるためのいろんな教育が同時に施されていた。それは親たちもそうで、自分の子どもは中学を出たら家の家業を継ぐみたいなそういう気持ちがあるから、いろんなことを教えていく。だから学校だけではなくて、家の中でも地域社会でもいろんなことを総合的に教えていく教育体系みたいなものがあつた。ところが進学が中心になると、親の方もまたそんな余計なことを覚える暇があつたら勉強しなさい、受験勉強しなさいみたいな方向に変わって行って、結局今のような教育が支配するようになってくる。そのことによって人間の何らかの能力が開発されなくなつていく。と同時に親たちもまたそつちに教育的価値を持つようになってくると、自分たちが持っている元の能力もつぶしていく。親子を問わずある種の能力の衰退が起きてきた。そのへんが一番大きい理由ではないかという人たちもいる。これも聞いてみると、「なるほどな」という気がしてくる。あるいはそういうことによって、人間の思考が非常に合理的、科学的になっていって、自然からのメッ

セージだとかキツネからの語りかけみたいな、そんな非合理的なものについてとらえることができなくなっていく。そのへんだらうという人たちもいる。

まだまだいろんなことを言う人がいるし、これはたぶん、わたしはそれが原因ではないかと思う人がいればそれでいいわけです。いろんな理由がまだあるかもしれない。ただ、今まで挙げた理由というのは、すべて自然界とかキツネの側は変動してないのに、人間の側が一九六五年あたりを一つの境にして、何か大きな能力変動が発生して、それが今までの自然と人間のコミュニケーションを変えていったという、そういうとらえ方ですね。ただ少数意見としては「いや、キツネの方が変わった」という意見もあります。その一つの意見は、日本はちょうど高度成長が始まる一九五六年ぐらいから、「拡大造林」という言葉を使っただけですけども、山の方で天然の木を切って杉とかヒノキを植えていく、人工林を作っていくというのが一斉に拡大したんですね。そのことによって山の中から大木がなくなっていく。植えてから最初の二十年間ぐらいは、いわば木としては本当にもやしのような状態ですから、若い木だけがある。山の中の大きな木がなくなっていく。そのことによって、つまり自然の変化によって、老キツネが暮らせなくなっていった。人間をだましていたのは、年を取った老獺なキツネですね。そういうキツネが暮らしていく基盤がなくなってきた、若い元気なキツネばかりになってきた。その若い元気なキツネではまだ人間をだます能力に達していない。そのことを言う人がいて、聞いてみると、「なるほどなあ。それも一つかもしれないな」と思います。

それからもう一つ、同じような意見なんですけれども、拡大造林をしていくと、山の方でどういう現象が起きたかという、草原的な場所が増えたんですね。なぜかと言うと、小さな苗木を植える、外から見れば草原に見えるわけです。十年ぐらいすると、この小さな苗木が二メートルぐらいになってきますから、どうやら木が出てきているというのが分かるようになります。しかし最初は草原に見える。そういうふうになってくると草原性の生き物が増えてくるんですね。その中で特に増

えてきたのが、野ウサギと野ネズミだったんですね。野ウサギと野ネズミが増えてくると、せっかく植えた苗木をかじるんですね。だから植えた木が枯れてしまう。そのために野ウサギ、野ネズミ退治というのが当時行われていて、その退治の方法として山にキツネを放しているんですね。これは一九六〇年前後に全国で一斉に行われました。キツネに捕ってもらおうという簡単な話なんですけれども、その放したキツネが人間に養殖された能力がないキツネでした。その血が混じって六五年前ごろになると本当の天然のキツネの能力がなくなったという人がいました。

ですから後者二つというのはキツネ側の能力が衰退したということなんです。ただこれもまたその原因を作ったのは人間であるということには変わらない。圧倒的に多くの人たちが言うのには、どうも戦後の高度成長とか、それから進学率の向上、あるいはコミュニケーションの在り方が変わったこと、そういうことを経ながら、人間の側の能力がかなり大きな変動をしてみたのではないかということです。確かにそれを一つずつ見ていくと、一つずつは論証できるわけではないけれども、何かあの時代に人間たちの大きな精神革命が起きていたのかもしれないという、そういう気持ちにはなつきません。

六、個人と関係性

——人間の存在と他者との関係

ですので、最近では私も、この一九六五年あたりに日本の人々がどんなふうに変動したのかということにかなり大きな関心を持って見えています。そのことを皮切りにしながら書いたのが『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』という本です。結局その中でも私が問題にしていたのは、人間たちが付きあってきた他者です。それは伝統的には人間という他者でもあるけれども、自然という他

者でもあります。あるいはその自然の中に神という他者も見たりしてきたわけです。そういう他者というものと、どこでどう結ばれてきたのか。つまり他者との関係なんていう言葉を使うと、今、わたしたちは非常に合理的な他者との関係を考えやすい。例えばある人が困っている。じゃあそれにどういふふうに手を差し伸べるか。もちろんこれも大変重要なことですから、いろんなことを考えなければいけないんだけど、やっぱり村にいて感じるということのは、他者との関係というのは、そういうふうに、「困っている、だから応援する」とか、そういうふうに説明のつく世界のことだけに収まらないということです。

この説明のつく形で他者と結び付くというのを、仮に知性によって結び付くというふうに言うとする、実は村における他者との関係というのは決して知性だけでは結び付いてないわけで、もう一つ、体自体で結び付いている。つまり自然との結び付きでもそうですけれども、例えば春になつてくると、自然の香りが変わってくる。そういうことを通して私たちは自然と人間の関係を結んでいる。僕はそこまで行かないけれども、村の魚釣りの名人なんかになると、川に行くと、「うん、魚の香りがあるの辺からだよつてくる」とか言って、釣る人がいるんですけども、とても僕には分からないですが、もしかするとそれもあるかもしれないと思います。

それにはいろんな形があつて、こちらの方は知性の方にむしろ属するのかもしれないけれども、この後、五月ぐらい、ゴールデンウィークぐらいに入ると、村で暮らす人間として大変注目しているものがあります。それはハチの巣がどこにできるかということ。ハチの巣が北側にできる場合と、南側にできる場合があつて、どっちにできるかによって夏の暑さをハチが予想しているんですね。今年の夏は涼しいと読むと日がよく当たる所に作ってきます。逆に今年の夏は暑いと予想すると、むしろ涼しい所に作ってきます。それからもう一つはちょっと奥まった所、例えば軒の下の奥の方とかですね、そういう所に作るのか、それとも風通しの良い所に作ってくるかというのもありま

す。これは何を考えてその変動をやっているかと言うと、夏から秋にかけて台風が来るかどうかというのをハチは予想している。特に暴風雨型台風ですね。結局、雨にひどく濡れた所で大風が吹くと巣が落っこってしまう。ですからハチというのは、巣を作る時に秋までの天気予報を頭に入れて作っているのです。人間の側にはとてもこの能力がないですね。ハチがどういふふうにするのか大変注目しています。

ただ、ちなみに申しますと、この十年間ぐらい、ハチは予想を外しています。かつての三十年間ぐらいは非常に正確でした。ハチの言う通りに準備しておけばまず間違いはなかったのです。だから今年の夏は寒いという時には、寒い対策をしておく。具体的に言うと、春先の堆肥の投肥量を増やす。それで地面の発酵熱で暖められるようにしておく。そういうふうな農作業をしておくというのと違ったんですけれども、最近はお外れっぱなしですね。結局、今、動物や昆虫類も予想できないような気候変動が起きているということなんです。ですので最近によく外しています。ただそれにしても人間が予想するよりはましなので、一応今年もゴールデンウィークぐらいになったら、どこに巣を作るかなというのを見ます。

ただカマキリの卵と雪の関係は、今年も報告を見ていたら、非常に正確だったそうですね。カマキリは卵を草の枝みたいな所につけますけれども、雪が何センチ降ってもまだ上に出ている所につけます。だから低めにつけている時は雪があまり降らないし、高い所につけている時には大雪になるということです。今年は大雪が降った地域でも非常に正確だったそうです。どうも雪予想は当たっているんだけれども、夏の暑さと台風予想は外れてきているといいます。ただこういうようなものも、彼らは何によって予想しているのかよく分からないです。ただ自然界に生きているものたちの一つの能力ですね。そこに接している時に、確かにハチの巣はどこに作ったかなという感じている時には、知性で関係を持っているわけだけでも、でもそこにはやっぱり自分たちの生きる世界を共有していると

いう、一つの身体の共有性みたいなものが、身体の結び合いの共有性ですね、そんなものがどこかにあります。

もう一つ言えることは、これは鈴木大拙という、戦後まで活躍していた仏教学者の言葉を使えば、「靈性」、つまりスピリチュアルな靈性ですね。ただし鈴木大拙もまた、靈魂が存在するとかいう意味で靈性と言ったわけではなくて、知性でもないし身体性でもない、ただ奥の方にある何か、そういうものを指して彼は靈性と言っています。僕も全く同じような意味で、そんなようなものを通して結んでいる世界みたいなものがあると思います。だからそれを生命そのものと言っていいのかもしれない。わたしたちはかつて自然との間でも知性を通して結んできた。だけど身体性を通して結んできた。けどもう一つ、靈性としか言いようがない、あるいは生命そのものとしてとしか言いようがない、そういうものとの結び付きの中でも自然と結んできた。その三つの結び付きの中で、わたしたちは自然との関係を作りながら生きてきたんだろうと思うのです。

それが先ほど言った一九六五年以降ぐらになつてくると、その靈性的な結び付きというか、生命そのものの結び付きみたいなものが消えていって、そして身体を通した結び付きみたいなものも消えていって、次第に自然というものが知性の対象だけになっていく。そうなってきた時に、おそらくキツネがだまされたかどうかはともかくとして、少なくとも私たちは自然のメッセージというものを正確には読み取れない人間に変わっていったということはたぶん言えるんだろうという気はします。

ですから、こういう変化の中で、実はこの本というのは、われわれにとつて歴史とは何だろうということを書きたかった本でもあるわけです。というのは、わたしたちが今、歴史と呼んでいるものというのは、知性で後追いでできる歴史だけを歴史として書いている。だけでも本場の歴史というのは、人間が生きてきた歴史なわけですね。例えばいつも村にいますかと思うんですけども、例えば一六〇〇年に関ヶ原の戦いがあったというが、うちの村にとつてはこれはあったんだろうかと思うわけです。

ね。というのは、うちの村はあまりにも山間地域だったこともあって、戦国時代でも誰の領地でもないです。独立村なんです。つまり誰も取りに来なかったと言ってもいいといえます。それは実は境界線の村というのがあって、大きな大名が接していて、その境目に空白になってしまふ村がたまにあるんです。僕の所は、南とか西の方は武田信玄の領地なわけですね。それで、東の方を見ると北条家の領地なんです。北からはよく上杉が来るわけですね。その大きな大名が三人顔を見せている。そうなる、うちの村というのは戦をする時の通過地点には使い得るんですけれども、もともと米はとれませんから年貢なんかないようなものですね。そうするとそこを取っちゃうと、逆に向こう側の大名に警戒される。ですから下手なトラブルを起こすよりも、本当に攻める時は通過するでしょうけれども、ちょっと放っておいた方がいい。それで三すくみの状況になってしまつて、結局誰も取りに行かないという、そういう場所なんです。だから実は、古代の律令制の時代から登録されている場所なんだけれども、一貫して誰も取ったことがない。だから独立村という、日本の中では珍しい形態ですけれども、そういう村です。

そういうふうな村の中で生きてきた人間たちからすると、関ヶ原の戦いというのが本当にあったのかどうかというのがよく分からない。ただしその後、江戸時代になってくれば、その体制の中にだんだん組み込まれていきますから、うちの村で関ヶ原の戦いというのは江戸時代の体制に組み込まれていくようになって、初めて発生してきたと言っているのかもしれない。だから、例えば、大化の改新が何年にあったとしても、あまりうちの村には関係ありません。律令制が布かれると、確かに番地としては登録されてくるけれども、だからといって支配者が来たわけでもないし、国分寺ができたわけでもない。

結局そこに住んでいた人間たちの歴史というのは、冒頭申し上げたように、毎年春が来たら畑を耕して、山に行って燃料を取ってきて、そうやって山の中に神や仏を見て、時には余裕ができると石仏

を彫って安置して、手を合わせてという、そうやって生きてきたわけですね。そこにこそ本当の人間の歴史があつて、その歴史というのは知性の歴史もあるけれども、まさに身体性の連続の歴史といいたまふか、そういう歴史でもあるし、あるいは靈性とか生命性でしか見えないような、本当に生きてきたという歴史、そういうような歴史があるわけです。結局このような歴史というのが、今の歴史学からは見えない歴史になつてゐる。それで本当に歴史なんだろうか。本当の歴史というのは、うちの村だけではありませんけれども、それぞれのローカルな地域でそれぞれ生きてきた人たち、その人たちがどういふふう生きて、何を積み上げてきたのかという、その歴史を見出してこそ、本当の歴史だろうという気がします。

七、まとめに代えて

——現代におけるローカリズムの意味を問ひなおす

ですので、そういうこともまた上野村みたいな里にいと、日々感じてくる。冒頭申し上げたように、今、実はそういう世界からもう一度学び直そう。こういうものを非科学的とか何だといつて切り捨ててきた。特に経済的な価値がないといつて切り捨ててきた。そういうものによつて、わたしたちはある種の便利さも手に入れたし、それからある種の物質文明的なものも手に入れた。それから確かに、十二時間ぐらい飛行機に乗っていれば、パリでもロンドンでも着くということが可能になつた。だけでももしかすると、一九六五年ごろの変化に現れているように、非常に大きなものを失いながら来た歴史だったのかもしれない。今人々はそんな気持ちを抱きながら、もういっぺんローカルな世界みたいなものをつかみ直す。里的な世界をつかみ直す。そういう時代に今、入つてきているような気がします。その在り方というものは日本だけではなくて、先に言ったように、ヨーロッパでもかなり

起きてきています。それがヨーロッパにはヨーロッパ的な出方ですけれども、フランスなんかではかなり過激なものも含めながら、一種のローカリズムみたいなものが展開し始めている。ですので、今の歴史というのは、ますますグローバル化していく世界みたいなものがありながら、けども一方において何かをつかみ直そうとしている。そういう時代でもある。そんな時に今、私たちは生きているのではないかなというふうに思っています。

（編集者注…本稿は、平成二十二年三月二十日に開催された、モラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「公開講演会」の内容を収録したものである。）